



映画に
宛てた

ラブ
レター

2016・8月号

天見谷行人

疑惑のチャンピオン

疑惑のチャンピオン

2016年7月11日鑑賞

ああ、山の流れのように

美しい山岳コース

下り勾配のS字コーナー。

「シュンッ」と、空気を切り裂くようにすり抜けてゆく、自転車ロードレーサー達の群れ。

それを背後から捉えるカメラがいいなあ～。

劇場の大きなスクリーンで、この景色を見るといいですよお～。

見事なコーナリング・テクニックを見せてゆくロードレーサーたち。

本当にこちらまで「ピレネー」や「アルプス」の雄大な山脈群を体験しているみたい。

ああ～、深呼吸したくなる！

爽やか！

気分スッキリ!!

爽快気分はMAXハイテンション！！

やっぱりスポーツって「健全」でいいなあ～。

えっ、そうじゃないの？

あれ、なに、その注射針。

なに、その飲み薬。

おいおい、自分の血液を「パック」に入れて冷蔵庫に保存？！

マジっ？ 変態か？ こいつら。

そこまでして彼らが栄冠を掴み取りたいもの。

それこそが、自転車レースの最高峰、と言われる「ツール・ド・フランス」である。

彼らの栄光への情熱と「執念」「情念」は、この作品を見ればわかる。

それはもう、並大抵の努力じゃない。



このレースに出られるレーサーたちは、すでに自国のレースで、数々の優勝を経験してきたツワモノばかり。

地元ではレースに出る前から

「あいつが出るんじゃ、優勝はもう決まり！」

と、マスコミでさえ、かえって注目しなくなるぐらいの、まさに「超一流」レーサーたちなのだ。

「TOP」中の「トップ」

「エリート」中の「エリート」

そんな彼らにとって「レースでの2番」は「負けた」ということ。

「レースは勝たなきゃ意味がない」

これはオートバイレースの世界を描いた、[新谷かおる氏の漫画「ふたり鷹」](#)のなかのセリフだ。

「負ける」ということは、かれらにとって「自分の全存在を否定」されることなのだ。

それほどの屈辱感、悔しさを味わい、それでも「次のレースでは勝つ」と再び立ち上がる。

ロードレーサーにとって必要なのは、そういう「ガッツ」「体力」と「気力」だけなのだ……、と永らく思われてきた。

しかし、近年、それだけでは「レースに勝てない」ということが常識になっている。

そこで必要なのが「勝つ」ための「戦術」であり「戦略」なのである。

本作の主人公、ランス・アームストロングは、25歳で癌を宣告される。

しかし、それを克服し、みごとにロードレーサーとして返り咲いた。

そして彼は、ある「戦術」と「戦略」を駆使して「ツール・ド・フランス」前人未到、7年連続総合優勝に輝いた。

だが、しかし、かれの「戦術」と「戦略」は、一人のイギリス人記者、デイヴィッド・ウォルシュによって、その「秘密」と「実態」が暴かれてしまう。

本作は、癌に侵されながらも見事にレースに振り返り咲き、がん患者の希望の星として、多くの人に勇気と希望を与え続けた英雄の、まさに「栄光」と「転落」を描く。

監督は[アカデミー賞に輝いた「クィーン」](#)のステイブン・フリアーズ氏。その映画作家としての腕の確かさは、本作でも随所にうかがえる。

特にレースシーンでの美しい風景。

対照的に、各レーサーの火花が散るような勝負の駆け引き。

手持ちカメラではなく、ステディカムを使った、ブレのない映像シーンは、本当に映画館で観る価値がある。

そういえば最近、ようやくハリウッド系などの映画も、一時、馬鹿の一つ覚えみたいに”ブレブレ”の手持ちカメラを使っていたが、今はもう、流行らなくなったみたいだ。

しょせん、一時の流行である。

映像手法は、そんな流行に左右されることなく、本当の人間ドラマをじっくり捉えてほしい。

そのためのカメラなのだから、これからの若い映画監督は、よく理解した上で、じっくり撮影方法を選択してほしいものである。

それにしても、本作で描かれる「ドーピング」

さらには、自分の血液を常時冷蔵庫に保管しておく、など、これらはまさに、サイクルレース界を永く密着取材しなければ、なかなか得られない情報である。

本作は、そのレース界の闇に迫った、ノン・フィクションを元に映画化された。まぎれもない実話なのだ。



全編を通じてドキュメンタリータッチで描かれる本作。

レースのシーン、選手たちのプライベートをはじめとして、突然のドーピング検査のシーンが特に印象的だ。検査官を外で待たせ、限られた時間の中、際どいタイミングで、必死に証拠隠滅を図ろうとするレーシングチーム。

そしてスポーツ医学と選手との関係。

そういえば、もう直ぐ「リオ・オリンピック」である。

選手たちは、もちろんドーピング検査に神経質だ。それも極度にだ。

細心の注意を払って、常備薬の成分を何回も見直し、

「大丈夫だよ」とマネージャーから手渡された何気ない「かぜ薬」が、もし、違反薬であったなら。

実際、過去には、選手たちが意図していないのに、チームの意向でドーピングを「させられていた」選手たちがいた。

そして栄光は剥奪される。

選手たちのその後はどうなるのか？

自分のこれからの人生、どう生きていきたいのか？

「人と競い合うこと」

「勝利すること」

ただそれだけに、全人生を捧げてきたスポーツマン、アスリートたち。

野球の世界では、ぼくは野村克也さんが大好きだ。

野村さんのボヤキのひとつではないが

「人生はね、野球を引退してからのの方が永いの。今のうちから、ちゃんと人生を考えなさい」
常日頃から、そう「弟子」たちに説いていた。

そして楽天の監督引退式では、パリーグ全チームの選手たちから胴上げされ、祝福を受けた。野
球人として、また、ひとりの人間として、最高の生きかたの見本ではないか？ と僕は野村さん
を見てそう思う。

本作で描かれる主人公ランスは、もちろん実在の人物で、現在44歳なのだ。まだ、44歳である。
これからが人生の後半戦。折り返し点にある彼。

これから待ち受ける「ロング・アンド・ワインディングロード」は、緩やかで景色のいい「くだ
り坂」なのだろうか？

あるいは、きつい「上り坂」が、まだ待ち構えているのか？

本人はこの映画を見てどう思うのだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 スティーブン・フリアーズ

主演 ベン・フォスター、クリス・オダウド、ダスティン・ホフマン

製作 2015年 イギリス・フランス合作

上映時間 103分

[「疑惑のチャンピオン」特典映像](#)

ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります

ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります

2016年7月24日

[パルシネマ](#)にて二本立て鑑賞

歳をとるにも「コスト」なんだよね。

世界の大都市である、Tokyo,Japn の物価の高さは、飛び抜けていますね。

[過去のランキング](#)では常にトップだったようです。

当然のごとくニューヨークも、やっぱり「お高い」

世界を代表する大都市の一つだから、それも仕方ないかもしれませんが。

本作に登場する老夫婦。

モーガン・フリーマンとダイアン・キートンが演じる、アレックスとルースの熟年ご夫妻。

この二人は、大都会のアパートメントに、40年間暮らしてきました。

部屋は5階建ビルの最上階にあります。

眺めは最高。

ニューヨーク、ブルックリンの街を、独り占めできるような展望です。

夫のアレックスは、そんな部屋をアトリエにして絵を描いている画家です。

アレックスは毎朝、愛犬のドロシーと散歩に出かけます。

このドロシーとも長い付き合いです。ペットというより、もはや家族以上の存在。

散歩の途中でコーヒーショップへ立ち寄り、二人分のコーヒーを持ち帰るのが日課になっています。

アレックスとドロシーは、ふたりして朝の散歩を終えて自宅に帰ってきました。

アレックスの片手にはドロシーのストラップ。もう一方の手には、二人分のテイクアウトのコーヒーを乗せたトレイを持っています。

最上階5階までの階段を、一段、また一段、のぼってゆくアレックスと愛犬ドロシー。

やれやれ、体がきついなあ～。

歳を重ねるごとに、5階まで登る階段がきつくなってきました。

愛犬ドロシーも、寄る年波に勝てず、階段を登る途中で休憩するような有様です。

というのも、このビルには、そもそもエレベーターがないのです。

それ以外は、ほぼ完璧な「物件」なのですが。

そんな二人を見て、奥さんルースは、一つの提案を持ちかけます。

「いつまでもこの部屋にはいられないわ。エレベーターつきの、暮らしやすい部屋に引っ越しましょうよ」

アレックスにしても「確かにそうかもしれない、彼女の言う通りだ」と思う反面「いや、しかし、この住み慣れた部屋から出て行く、というのはなあ～」

なんとも、複雑な心境です。

確かに愛犬ドロシーだって、階段は辛そうだ。

散歩も、そう長く楽しめないかもしれない。

アレックスも、渋々、自宅を売りに出す決意をし、不動産のエージェントをやっている、姪っ子のリリーに自宅売却を依頼するのです。

ン・キートン共演！映画『ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります...』



アトリエのガラクタを 片付けて

やり手不動産エージェントのリリー（シンシア・ニクソン）は、仲介手数料をかせごうと虎視眈々です。

アレックス夫妻の部屋を、さらに魅力的に見せるために「こうなさい、ああなさい」と指示を出してきます。物件の内覧会「オープンハウス」の日が勝負なのです。

そんなおり、愛犬のドロシーに異変が。うまく歩けません。

熟年夫妻は、急いで医者連れて行こうとします。

この時の医師とのやり取りが興味深いですね。

ドクターによると

「病名はヘルニアです。手術が必要ですね。費用としては**万ドルかかるでしょう」

ワオッ？！

アメリカでも日本でも、ペットの医療費は高額なんですね。

さらには、事もあろうにアパートメントの近所で、テロが発生！！

不動産屋のリリーは頭を抱えます。

「Ohマイガー！！ 相場が下がっちゃう！！」

いったい内覧会はどうなるのか？

アレックス夫妻の決断は？

愛犬ドロシーはどうなるのでしょうか？

本作を見ていて面白いのは、大都会を舞台にした暮らしぶりであり、それはズバリ

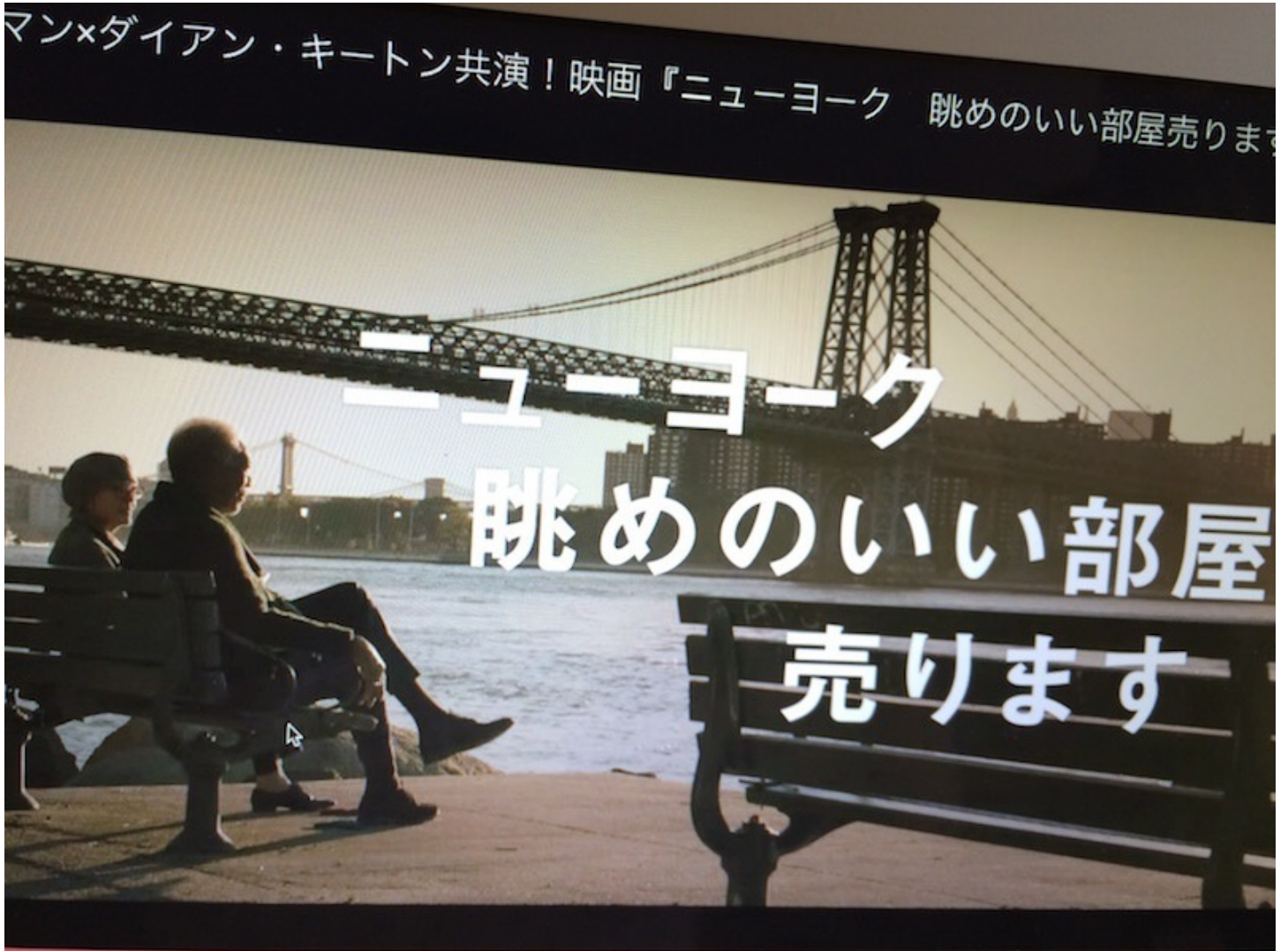
「お金」「プライス」なんですね。

ペットの病気治療費用が数万ドル、さらにはアレックス夫妻のアパートメント、その資産価値な

んと100万ドルオーバー。

日本円に換算して1億円を楽に超える物件です。

そんな物件に、今までどうやってローンを払っていたんだらう？ などと僕なんかは思ってしまったのですが。



アレックス夫妻は、決して贅沢な暮らしをしているわけではないのです。また、望んでいるわけでもない。

ただ、アメリカで最も歴史の古い町の一つ、ブルックリン。

250万人が住む、人口密度は高いけれど、落ち着いた雰囲気のある街並み。

ここで暮らし続けたい。大都会で慎ましやかに暮らすこと。

そう思う老境に入った夫婦を演じるモーガン・フリーマンとダイアン・キートン。

役者として、年輪を感じる演技は「さすが！」の一言でした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 リチャード・ロンクレイン

主演 モーガン・フリーマン、ダイアン・キートン

製作 2014年 アメリカ

上映時間 92分

[「ニューヨーク 眺めのいい部屋売ります」](#) 予告編映像

ビューティー・インサイド

2016年7月24日

[パルシネマ](#)にて二本立て鑑賞

123人の僕が君を愛してる

へえ～、韓国映画もこんな作品作れるんだ、というのが率直な印象。

韓国の漬物を代表するキムチ。同じ漬物でも、本作は日本の「浅漬け」のような印象です。

とってもスッキリ、あっさりした口当たりの良さ。

そんな感じなんですね。

本作の背景になっている舞台にしても、とっても洗練されていて、ハイセンス。

おしゃれ感覚あふれる家具と室内空間。

監督はCM畑の出身。カンヌ国際広告祭で受賞歴を持つ、ペク監督です。

どうりでねえ～、オシャレなわけです。

さて、そんな素敵な舞台設定はできました。

ストーリーです。

主人公の男性。

彼は家具のデザイナーをやっています。

おもに椅子が専門。

かつて僕もインテリアを勉強した経験があります。

たかが「椅子」とバカにしちゃいけませんよ、あなた。

実は世界中のデザイナーが、こぞって歴史に名を残す、名作椅子を作ろうと、日夜しのぎを削っているのですよ。

ぼくは、某美大の図書館に頬かむりして忍び込んだ時、玄関ロビーになんと、あの世界的建築家である、[ル・コルビジェの椅子](#)が飾ってあるではありませんか！！

辺りをキョロキョロ見回して、僕はその椅子にそっくり返って座りましたよ！

「ああ、巨匠！ コルビジェの椅子に座ってるううう～！！」

まあ、病気ですな。変態ですな。

まともな”良い子”は真似しないようにね。

さて、本作の主人公ウジンは、芸術家肌と言うより、職人さんに近い感覚の持ち主。性格は内向的なんですが、いわゆる草食系で「ど・ノーマル」です。

ただ一点を除いてはね……。

彼が他の誰よりもただ一つ、強烈に違う事。

それは一旦眠って目がさめると、姿や性別まで別人になってしまう、という事なのです。

彼ウジンが想いを寄せるのは、アンティーク・インテリアショップで働く「イス」という女性。

まあ、韓国モノをいくつもお覧になっている方には百も承知でしょう。「これでもか！」という美女でございます。



「イス」にしても、ウジンのデザイナーとしての才能、魅力にひかれ、やがて彼自身の人としての魅力に惹かれてゆきます。

「目覚めるたびに別人になる」という、ウジンの秘密さえも受け入れたイスなのですが、やがて職場でいろいろと噂が。

「イスは男をとっかえひっかえ、付き合っているらしいよ」

「あんなに男漁りしていたなんて」

「人は見かけによらないわよね……」

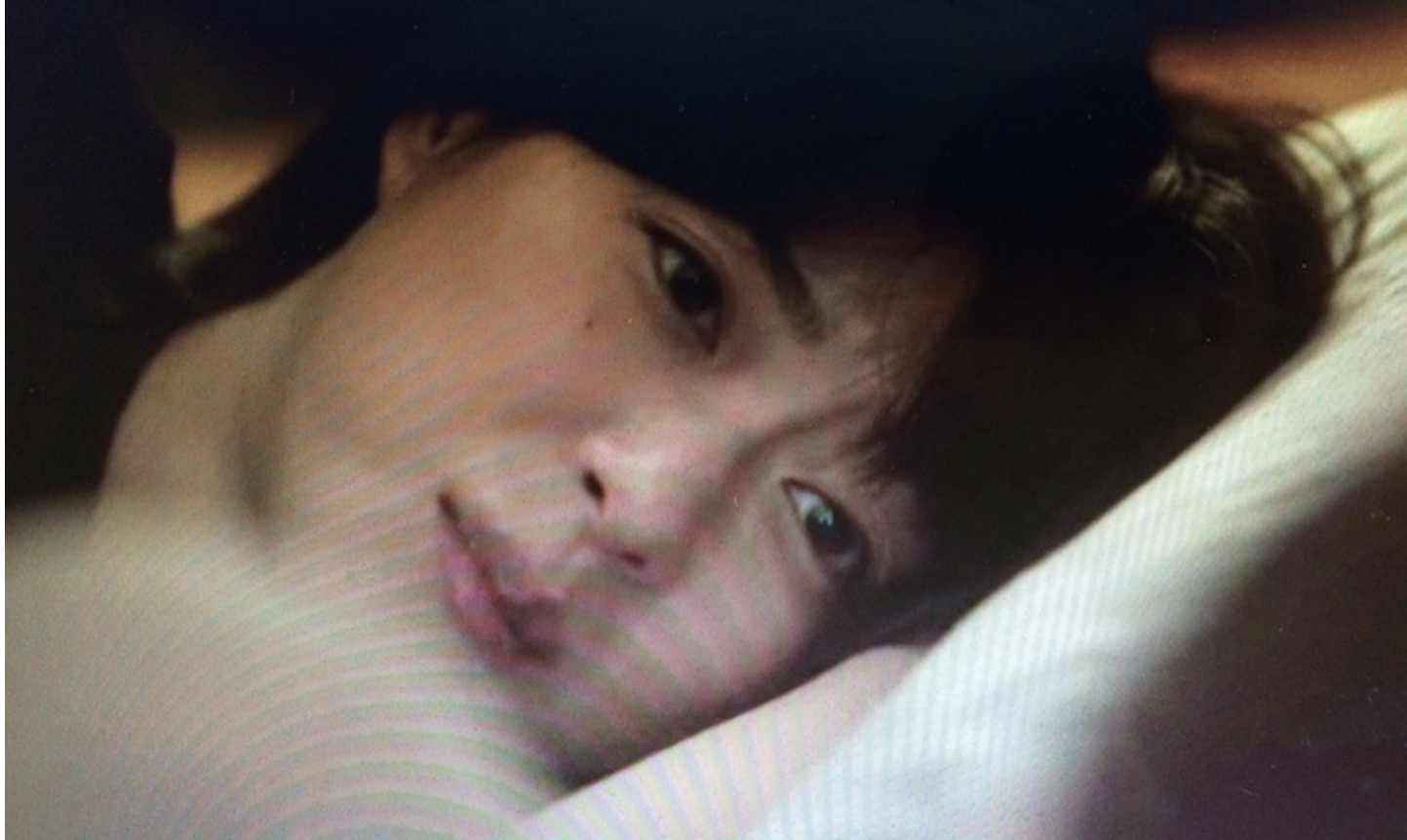
などなど。

そりゃそうでしょう。イスはウジンただ一人とお付き合いしているのですが、ウジンは、毎日、容姿も性別さえも変わってしまうのです。本作でウジンが変身する、その人数、なんと「123人」ウジンが女性の姿になった時、その一人を演じるのが、日本から参加した上野樹里です。

「のだめ」シリーズで韓国でも大人気の彼女。

本作では実に静謐な演技で、ほぼ、目線の移動、まばたき、ささやくようなセリフ回し。その眼差しで一瞬にして「上野樹里の雰囲気」を作り出してしまうのは、さすがの貫禄でした。

『ティー・インサイド』 日本オリジナル予告編



本作は「もし~だったら」という、一つの思考実験映画という見方もできるでしょう。人間は生物学や医学の見地から言えば、絶えず細胞は死滅し、新しい細胞に生まれ変わります。約三ヶ月程度で、全身の細胞は、脳を除いてはほぼ全部、入れ替わってしまうそうです。三ヶ月前に出会った同一人物は、生物学的には、別人と言ってもいいわけです。本作の主人公ウジンでは、それが極端に短い「たった1日」でおこってしまうということなのです。

韓国映画は、その独特のどぎつさとアクの強さがある、という偏見を、僕は永らく持っておりました。

そのため映画作品鑑賞もイマイチ敬遠しがちだったのです。

しかし、こういう「浅漬け」のようなサッパリ味の作品なら、僕でも違和感なく鑑賞できました。

また、本作のペク監督の感性というのは、どこか日本の「はかなさ」に通じるものがあると感じました。ペク監督なら日本の「もののあはれ」という感覚を作品に込められるのではないかと思えるのです。

たとえば、日本の古都「京都」を舞台に、恋愛ものであるとか、あるいは、世界的クリエイターを目指す若者などを描いてもおもしろいのでは？ と思いました。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ペク

主演 ハン・ヒョジョ、パク・ソジュン、上野樹里

製作 2015年 韓国

上映時間 127分

[「ビューティー・インサイド」](#) 予告編映像

存在する理由 **DOCUMENTARY of AKB48**

2016年7月12日鑑賞

「AKBがAKBでありつづける」には？

ここであなたに質問。

「今のAKB48メンバーで”レコード大賞が獲れる”と思いますか？」

2011~2012年連続で、AKB48は「レコード大賞」を獲っている

あのときの勢いは本当にすごかった。

僕は第三回選抜総選挙のころ、妙にテレビがAKB,AKB,と連呼しているので、「何が起きているんだらう？」という興味からAKBをウォッチし始めた。

ミイラ取りがミイラになる、という古いことわざがあるが、まさにその通り。

このあと僕は、AKBの活動をテレビやネットで見続け「ダダハマリ」することになる。ただし、ピンボー一人で関西に在住していることもあり、AKB劇場には、一回だけ雰囲気を観察しに行ったことがあるだけだ。たまたま公演中に

「どんなところかいな？」

と、のこのこエスカレーターに乗って上って行った。すると、劇場前にスタッフが仁王立ちになっており、客席ではなく、AKB劇場ホール、そこそら入ることが許されなかった。

「はて”会いに行けるアイドル”とは、どこにいったのだらう？」

よく、AKB劇場は「ドンキホーテの上にある」と言われる。

間違いではない。

僕も現地に行くまではそう思っていた。しかし、東京、秋葉原のAKB劇場の建物の前に行った時、

「はあ?!」

と思った。なんのことはない。

記憶が定かではないが、一階と地階は確かパチンコ店であった。

そのパチンコ店の上に「ドンキホーテ」があり、そのまた上にAKB劇場があるのだ。

「やっぱり現地に来ないとわからないなあ〜」とおもう。

では、なぜ

「パチンコ屋の上にAKB劇場がある」といわないのか？

たしかにパチンコは18歳未満は入場できない。プレイできない。

そういう射幸心を煽る、青少年には有害とされるギャンブルのホールの上に、

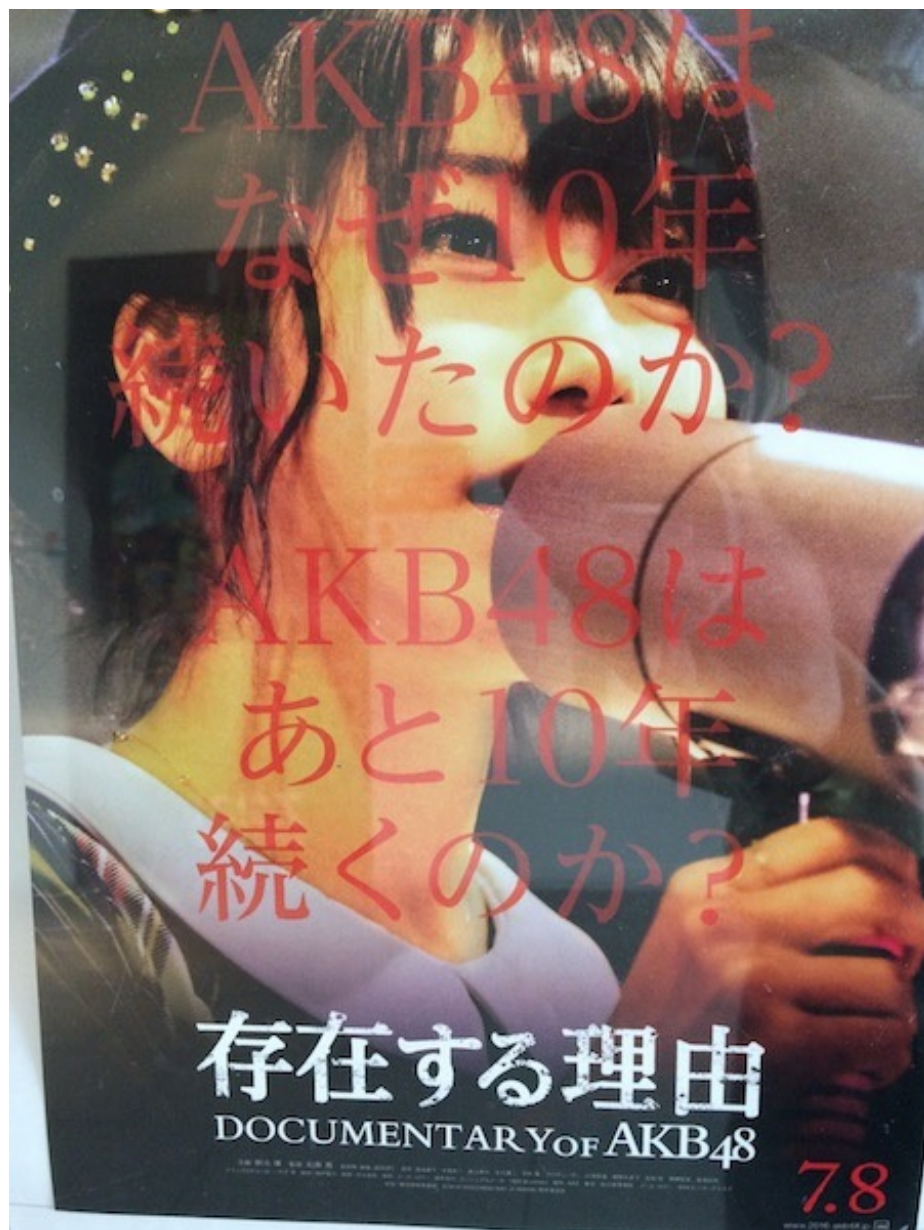
「健全な青少年である少女達」が歌って踊るホールがある。

僕みたいな「変なオヂサン」には、このあたりの事情がよくわからない。

まあ、それはひとまず置いといて。

レコード大賞の件である。

僕は今のAKBメンバーでは正直、三回目のレコード大賞は「獲れない」とおもう。



レコード大賞は、CDなどの販売数でだけ評価されるのではない。若干、テレビ局なり、あるいは著名な審査員たちの「主観的評価」が加味される。

2011~2012連続受賞の時は

「わかりました。もう、AKBの運営システムは認めざるをえません」と、審査員達がバンザイしてしまったように僕には思える。

なにせ、週に一度行われる握手会など、独自のシステムでファンを囲い込み、さらに、選抜総選挙という一大イベントによって、ファン心理を不安に陥れる。それにより「なおさら応援しなきゃ!!」とファンを煽って、財布を開けさせる。

何もこれは悪いことではない。

AKBの初期は、総合プロデューサーである秋元康氏とメンバー、スタッフ達、すべてが手探り状態で、試行錯誤の上、今のシステムにたどり着いたのである。

その途中、多くの初期メンバーが脱退して行った。

「それが正解だと思ってました」と後にエースと呼ばれる、前田敦子や大島優子が語っている。

それでも彼女達は5年、6年と耐えた。

AKB初期メンバーである篠田麻里子は、発足当時、路上でAKBのチラシを配っていたのだ。食費にすら事欠き「部屋でカイワレを育て、スープにしていた」と語っている。同じく初期メンバーの板野友美の名台詞がある。

「つらいことなら、慣れてます」

のちに女子中高生のカリスマ、ファッションアイコンとなる彼女は、いったい「売れるまでに」どんな歩みをしてきたのか？

リーダーである総監督「高橋みなみ」を筆頭に、当初は歌もダンスもできない、どこから拾ってきたのかわからないような、普通の女の子達が、やがてJ-POPの大黒柱となるとは、誰が予想できただろうか？

よくAKBは「高校野球」に例えられる。これは秋元氏自身も認めていることだ。

つまり、パフォーマーとして、完成された形を、あえてAKBの場合「売り」にしていないのである。

僕がいつも思うのは、テレビのバラエティにしる、AKBの最も面白い、美味しい部分は

「バックステージ」なのである。

あえてバックステージを晒し者にして、

「こんなにこの子達頑張っているんです。だから認めてください」

そしてファンは

「はい、認めます」

という同意のもとAKBシステムは成り立っているのである。

応援しているファンにとっても

「この子は少しずつ、成長しているな、よし、じゃあ僕も頑張ろう」という、元気をもらえる。演じるものと、観客がお互い「WIN-WIN」の関係性なのだ、と僕は思っている。

さて、AKBは大きな転機を迎えている。

「神セブン」と呼ばれたカリスマたち、一期生、二期生がほぼ卒業。

そして、精神的支柱であった総監督「高橋みなみ」という最後のカリスマが、ついに卒業した。

これから先、AKBはどこにむかうのか？

「タカラヅカ」のように、伝統と歴史を構築していけるのか？

今の若手メンバーは、AKBが軌道に乗ったあとで入ってきた。

一から何かを作る、という作業をしていない。

しかし、一から作るその代償は大きい。多くの初期メンバーが夢半ばでAKBを去った。最後までAKBに残れた、売れるまで残り続けた初期メンバー達。その要因は何だろう？

僕は残った初期メンバーを見ていつも思う。

「彼女達はとびきり美しい雑草なのだ」

雑草は実にたくましい。

何度もなんども引き抜いても、また性懲りも無く生えてくる。

摘み取っても、摘み取っても、それでも生えてくる。

高橋みなみを始め、あの2011~2012連続レコード大賞受賞は、まさに「雑草魂の勝利」であったとおもう。

「歌も下手」「ダンスもできない」「トークもダメ」

でも頑張る。頑張り続ける。

「折れない心」を持ち続ける。

そんなたくましさは、新世代のAKBメンバーには、僕の主観として、いまひとつ感じられないところがある。

さて僕は、本作のドキュメンタリーについては、ほとんど語らなかった。

まあ、AKBファンなら、当然いろいろと、ネットで動画を見ているだろうし、いまさら、目新しいな、という映像はそれほどなかった。

ただ、JKTに移籍していた仲川遥香が、現地インドネシアでまさに大スターになっていることは、印象的だ。これも彼女がインドネシアで「一から石を積み上げてゆく」作業をしてきたからである。

またスーパー研究生と呼ばれた光宗薫が、今現在、AKB時代を振り返って、自分の今までのキャリアの中でも特別の意味を持つ、と考えていることは、ちょっと意外だった。

卒業した内田真由美も焼肉店をオープンさせ、充実した日々を送っている。その姿を見て、なぜかこちらまでホッとした感もある。

あのたくましさ、打たれ強さ。

それこそが、今後も「AKBがAKBでありつづける」必要条件であり「存在理由」なのではなからうか。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆

演出 ☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 石原真

主演 AKB48グループメンバー、およびスタッフ

製作 2016年

上映時間 108分

[「存在する理由 DOCUMENTARY of AKB48」予告編映像](#)

2016・8月号 映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/108398>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/108398>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/108398>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ